

The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton
George Eliotの小説における gossip, rumor の働きについて (2)

The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton
On the functions of gossip, rumor in the novels
by George Eliot (2)

嶋田 貴美子
Shimada Kimiko

(7)

Mary Ann を虜にした最初の異性であった Charles Bray の妻でありまた親友でもあった Cara の、Mary Ann に何とか幸せな結婚をさせようという尽力や、前号で述べたような数々の恋愛遍歴があったにもかかわらずいまだ独身の Marian に対し、兄や姉たちはいよいよオールドミス の身分の恥辱を意識させ続けていた。その折も折、その時 Mary Ann がもっとも心を寄せていた Herbert Spencer は、Mary Ann の自分への深まりゆく情熱に恐れを感じてその茅先を少しでも他方に向けるために、Mary Ann が副主筆となっている *Westminster Review* と同種の季刊誌 *Leader* の主宰者であった George Henry Lewes を正式に Marian に紹介したのであった。Lewes と Spencer は Lewes が Spencer の著書 *Social Statistics* の書評を書いたことですすでに交友が深まっていたのである。

Lewes は Mary Ann とは全く異なるはつらつたる経歴の持主であった。彼はそれまでに英文学、仏文学、独文学、西文学に関する論文を書いており、Goethe の模倣的な作品である小説を二冊出版し大衆向けの哲学史をも出版していたが、もともと彼は、代々にわたって華やかな actor として成功した background を誇る純血の actor で、1849 年には著名な俳優であるバリイサリバンたちと舞台に立ち、Shylock を演じたこともある。演技の方も彼の小説や詩と同様に失敗であったが、Shylock を虐げられた民族の英雄的復讐者とする彼の解釈は当時としては独創的なものと評価された。Lewes のこのユダヤ人観は、彼を知るようになってからの Marian のユダヤ人観を、反感からロマンティックな同情へと変えたのであった。まもなく俳優としての生涯に見切をつけ、批評家としての道に入った Lewes は専門的な劇評を書くようになり、1850 年 3 月に Thornton Hunt と共に *Leader* を発刊し、編集や寄稿に当たるかたわら Mary Ann が編集する *Westminster Review* においても健筆をふるい、「コント、ヘーゲルの哲学の観

念性を批判し、自然を基礎とする人間学の立場から唯物的な宗教批判を行っていたフォイエルバッハの思想や、その他ドイツを中心とする大陸思想の紹介と批評を論壇で精力的に展開する当代の華やかな知識人の一人⁽¹⁰⁾となっていた。そのように *Westminster Review* との関連も深かった Lewes であるから、Mary Ann と Lewes は Spencer にお互いを紹介されるまでのこともなくすでに顔見知りの間柄であったが、Lewes の方はいざ知らず、Marian の心は当時圧倒的に Spencer への思いによって占められていて、Spencer とは对象的に明朗活達であり常に芝居をしているような Lewes は理解しにくい人であって、是非とも人間関係を持つ価値のない人のような気がしていた。

Lewes は Ape とあだ名がつけられていたように小男で毛深く、かつての Marian の恋人達とは外見的にも対照的な人であった。礼儀作法も悪くまた野人的なところもあって、Lewes は特に女性の間にも不評を買い、彼の書き物の繊細さを欠いた荒っぽい主題の取り上げ方を非難するグループも少なくなかった。しかし Lewes は Marian には最初からとても親切だったし、彼の軽妙な明朗さは Marian にとっては快いものであった。Lewes は妻の Agnes とは Shelley 流の自由恋愛主義に基づいて生活することに合意しており、自らも複数の Sex-partner を持ち、Agnes にいたっては *Leader* が発刊された 1850 年 3 月の 1 ヶ月後に第 5 子を出産したが、その子供の父親は Lewes と共に *Leader* を運営する Hunt であったのである。しかし妻との間に自由恋愛主義の協定のある Lewes はその子を実子として届け出た。けれども彼らの結婚生活は Agnes がさらに 3 人の Hunt の子供を出産するにおよんでもはや存続不可能に到った。Lewes が Marian に会った時 Lewes はすでに Agnes とは別居していたが離婚することはもはやできない状態にあった。というのはお互いの間で協定が結ばれている以上法律の上からすれば、Lewes は妻 Agnes の姦通を半ば了承していたと見なされたからである。

1853 年の春頃から Lewes に対する Marian の考え方に変化が生じ、Lewes の外見は仮面であり、その下に良心的な心に満ちた素顔が隠されているように彼女は感じ始めてきたのである。9 月に Chapman の家を出て独立した生活に入った Marian は、Lewes のために *Leader* の校正を手伝うようになった。翌 1854 年 4 月、Lewes は病気になり Marian は二人分の仕事をこなすために懸命に働くことになる。この頃から Marian は二人の外国行きを決意していたらしい。そして 1854 年 7 月 20 日、彼らはドイツへと旅立ったのであった。

(8)

それは周囲の者にはとても唐突に見えた行為ではあったが、二人を結びつける糸は彼らが相知る前から微妙にたぐりよせられつつあったといえる。Spinoza、Leibniz、Comte の哲学の世界を Marian に啓示し、その中に彼女を導き入れたのは Lewes の論文であったのだ。それゆえ雑誌編集の仕事を通して身近に Lewes の性格や人柄の深層を知るにつれて、彼の存在との間に切れることのない絆を確信するようになったのも自然の帰結であった。その絆への確信が、破壊された家庭の全責任を負うべき長というきわめてむずかしい立場にあり、その立場ゆえに永久に安定した妻の座を自分に与えてくれる可能性のない Lewes と共に歩く決意を Marian に

させたのである。それにしても Lewes も Marian も自らがとったこの行為がこれほどの問題を引き起こすような大それたものであるなどという認識は全くなかったのであったが、二人そろって大陸に渡ったことが知れると、イギリス国内にいる彼らの友人知人たちはたちまちにしてすさまじい gossip の渦を巻き起こして、Lewes はもとより Marian に対しても scandalous な恥すべき友人としての烙印をただちに押したのである。Marian の親友と自他共に認めていた二人の女性、Bray の妻 Cara と Cara の妹 Sara は、Marian が 22 歳の頃 Bray のサークルに入った時からのもはや 15 年間ほどにも及ぶ友達で、これまで悩み多き Marian の相談相手になり、必要な時には暖かい励ましと援助を惜しまない人たちであった。しかし Marian の方から Lewes とのこの大陸旅行については彼女たちには全く何も知らされておらず、そのことについて Marian が彼らに何の謝罪もなかったことが彼らを怒らせる結果となった。彼女たちは Marian の中に見られる「感情の豊かさで知られる女性よりも強者として知られる男性の方をむしろ好む」その性格を改めて思い知り、にがにがしく思ったのである。

さらにいけな⁽¹⁶⁾いことに Marian は Chapman に宛てた手紙の中で「Cara と Sara がこの事情についてどれだけのことを知っているか、また彼女たちが私に対してどんなふうな思いを抱いているかなど、そのようなことはどうでもよいことなのです。私は慎重に考えた上で第一歩を踏み出したのですし、それがもたらすもろもろの結果をしっかりと受け止める用意はちゃんとできています。またその結果をいら立ちの中で、あるいはにがにがしく思いながら受け入れることは全くございません。ただその中の一番つらい結末といえ、何人かの友人を失なうことになるであろうということ⁽¹⁷⁾」と記されていたことである。この記述に対して妹の Sara ほど Marian のとった行動に不理解でなかった Cara ですら、何の良心のとがめもなく彼女の過去のつながりをあっさり打ち捨ててもかまわないと思っていることが明らかな Marian に強く反感を抱かざるを得なかったのである。しかし周囲から浴びせられた the outcast (追放者) とか the fallen (ふしだら女) とかいうような口汚ない evil speaking が耳に入ってきて、Lewes との大陸への旅は他の誰がとやかく言う筋合いのものではない自分だけの問題なのであるから、どんな gossip が広まろうが自分自身は全くかまわないとする Marian の態度は、writer としての彼女の一切が集約されている Bray の circle の面々の Marian に対する温情を逆なですることになり、結果として彼女は Cara、Sara の二人の親友を含んでいるその circle から疎外されていくことになったのである。

Cara の Marian への非難は Marian が合法的な結婚の見込がなく、何ら永続的な社会的身分を持たない人との関係にかたくなに固執するその軽卒さ (levity) や傲慢さ (pride) にすっかり埋没してしまっていることであった。しかしそういった周囲の思惑に対して「私たちは決して自堕落な生活を送っている訳ではありません…私たちは私たち自身の生活を支えることよりも他の人々 (Lewes の妻 Agnes と子供たち) の生活を支えていくことを優先させて一生懸命に働いているのです。これは levity や pride だけでできることではありません」と言⁽¹⁸⁾って Marian はそれに応酬している。つまり単なる身勝手ではない生活スタイル、仕事、責任、そういったものが、二人の結びつきがとかく性的な用語に置きかえられがちになる傾向にあるこ

とに対して自ら否定するために必要とされたのである。Marianが自認していたように彼女がこの結婚を選択した真の損失は、誰からももはや二度とdinnerによばれなくなるだろうということではなくて、彼女は二度と再び他の人から正確に解釈されたり評価してもらえなくなるであろうということであった。彼女はまた近しい人に「私についてあだこうだと人が言うことは何であれ決して信じないで下さい。だって真実のことを言い当てられる人は全く一人もいないのですから」「手紙によってほんとうの気持を提示することがいかに困難なことであるか、また長年友情を育ててきて相手を理解するに足る十分な錠が用意されているように見える場合ですら人々は何とたやすく誤解される運命に陥ることになるであろうかということを知り得る優れた理性を持ち合わせている人は私以外にはいないのです」と述べている。⁽¹⁹⁾

Lewesに会ったこともなかったCaraは、大陸でLewesと同棲を決意したMarianの知的なそして道徳的な生活において、いったいどんなことが起ったのかを全く知る余地はなく、自分とMarianは以前あれほどの親友だったにもかかわらずもはやお互いに計り知れないほどはるか遠くに隔たってしまったのを感じたのであった。それでもCaraは妹のSara HennelがMarianのこの行為に対して抱いたほどの激しい嫌悪は抱かなかったものの、夫Brayに対するMarianのかつての慕情を知っているだけに、Marianへの失望が心の中に再び大きく広がっていったのは言うまでもない。悪化の一途をたどるBrayのサークルの人々との関係、とりわけSaraとCaraの友好を何とか以前のままに維持していきたく思う気持からMarianは次のような手紙をSaraに書くことによって自分の気持を総括する。「Caraとあなた(Sara)と私の姉(Chrissey)の三人は私の心を、切っても切れない絆でゆわえつけ、実際に絶えず私の心を引き寄せる人たちです。私のあなた(Sara)への愛は未来が決して後もどりできない過去に安らっているのです。」「私にはあなたに帰属する過去との関連の中における諸々の事柄の喪失を埋め合わせしてくれる友達は——例え夫となる人であろうと——今後決して見つからないだろうと思うのです。」⁽²⁰⁾ Marianのこの手紙の言外にあるものは、8人の子供のうち夫ではないHuntの子供を4人も生んだ妻Agnesと離婚することができず、従ってMarianに永久に妻としての安定した座を与えてやることができない上に、別居しているとはいえ戸籍上は自分が責任を負わなければならない妻であるAgnesと8人の子供達があるにもかかわらず自らは何の定職も持たないLewesとのunityを喜びを持って選択した自分の犠牲的精神を何とかSaraに評価してもらいたいという強い気持であった。Saraに宛てた手紙の中では「私が自分自身を英雄視しているなどとは思わないで下さい」と言っているが、『Mary AnnのHoly War』のchapter⁽²¹⁾で述べたように、Marianはそういった自己犠牲の場に自分を置くことに限りないheroism⁽²²⁾を感じそして自己を美化する傾向にあったのである。またCaraに対してはMarianが犯した過去のもろもろの過ちにCaraがこれまで示してきた寛大さ(generosity)や是認(recognition)、そしてまた過去はどうであれ現在をよりよいものにしようとする潔さ(determination)をMarianは手紙の中で思い起させている。

(9)

つまり自己犠牲的な選択 (sacrificial choice) やそれに伴う周囲の者たちの誤解 (public misunderstanding)、過去の記憶の中にある敬虔なる言葉 (the pietistic language of memory) は当時の Marian の心を占有していた3つの大きな柱と言えるであろう。そしてその中から生まれた結論は自己犠牲を供なう人生の選択を周囲の者に正確に理解してもらうことはほぼ不可能なことであるというものであった。つまり Marian が Lewes との unity を選択したことに対する彼女自身の考え方と、親叔を烈火の如く怒らせて友人知人も彼女から離反せざるを得なくさせた彼女のその unity に対する当時の社会的通念の間には大きな隔たりがあって、それが両者の価値感の相違に根ざすものである以上、彼女がいくら説明しても解り合えない部分があるのは当然のことであったのである。実際のところ Marian は生涯 mistress (情婦、愛人) の地位に甘んじ正式な妻となれない自分の身分について、当時の文化が定義した sexual fallen woman であるとは全く思っていない。Marian は Lewes について「私がこれぞと思った人 (Lewes) に間違いはありませんでした。彼は私がこうむった犠牲を埋め合わせて余りある人です」と言いさらに Lewes との生活については「私は日々をますます幸せに迎えていますし、家事も今や私にはさらにさらに喜びに満ちそして有益なものとなってきています。愛情 (affection)、尊敬 (respect)、知的な同調 (interlectual sympathy) はなお深まりつつあります」と言っているように、彼女は自分の Lewes との unity に法律とか因襲とかの社会的拘束力が及ぶことを認めず、彼とのその unity に人間の尊厳と真実の生を見い出しているのである。しかし産業革命を経過して人々の考え方も徐々に古きを脱しつつあったとはいえ、1850年代初めの Victorian England においては Marian のこうした生き方は是認されずまだまだ異端と見なされざるをえなかったのであった。

そうした世間に対して Marian が自己弁護のために力をこめて訴えることは、自分は他の多くの女性とは異なって、Lewes との結びつきの中に selfish greed などというものは求めるべくもなく、Lewes と共に暮らす人生においては、大いなる至福を感じるものの常に sacrifice の概念がつきまといその sacrifice ゆえに自分が Lewes との unity を選択した行為は社会的に是認されてもしかるべきではないかという言い分であった。Mary Ann がかつて起した Holy War についての論文の chapter⁽²³⁾の中においても見てきたように、Marian は自分の犯した何らかの道徳上の罪に対する penalty として自己犠牲を強いる場面を自ら招来し、それに専心従事することに人生の美しさと heroism とを感じ易い傾向にある。そのように一種の narcissism に陥りがちな Marian の口から発せられた言葉は、Marian のとった行動を批判的な目で見ている周囲の者たちには当然傲慢にきこえ、Marian への風当たりはますます強まっていったのである。実際のところ Charles Bray は Marian と Lewes がとった行為は単なる scandal としてばかりではなく、必ずや失敗に終る誤ちであると思っていた。Lewes は脳充血を患って完治しておらず転地が必要であり、それに Marian が付き添って行っただけであろうと推測していたのである。Bray は「Lewes 氏が彼の妻の元を去ることについては完全に正当化されてしかるべきことで

はあるが、Evans (Marian) 嬢を彼の情婦にすることに関しては、彼は決して正当化されるべきではない」と言い、社会的通念に照らし合わせてLewesを批判し、Marianの自己犠牲の人生の選択への美化とheroismを地に落とす。つまりLewesは根っからの好色家であり、Marianをすぐに見捨てそうな危機感を誰に対しても感じさせる要因が大いにあったのである。

Evans-Lewesの問題で噴出したgossipやrumorに対して二人の間の絆の強さをappealし、Lewesとのunityは決して軽々しい気持で成されたものではなく、従って簡単に壊れるようなものでは断じてないと言いつつMarianの言葉通り、世間の視方とは裏腹に二人のunityは日々強い結束力を発揮していったのであったが、その事実をもってしてもrumor、gossipのわき出した根拠に対する解答はまだ不十分なのであった。つまり世間は、Evans-Lewesの問題においてはEvans (Marian)の方により落度があるのか、Lewesの方により大きな罪があるのか、またMarianはLewesの結婚を打ち壊したことに責任をとることができるであろうか、Lewesは妻や子供たちからMarianを踏み台にして逃亡を試みたのであろうかなどということに大きな関心を寄せていたのである。Marianは自らが起したHoly Warを戦っている中でも感じたように、再びこの時、gossip、rumorの中に身を投じることになった自分を自分自身ですら完全に理解することができないのであるから、周囲に自分をinterpretationすることなどどうしてできようかということを感じたのである。

George Eliotは自分の著した小説においてある登場人物の人生を正確に解説する場合、ただ一人の人にそれを任せることは決してしないで個人はcommunityの一部となりその機能的視点から個人を見る。humanを模索することに力を注ぐGeorge Eliotの小説執筆の手法として、それはこれまで述べてきたような人生を送ったMarianが編み出した人生を論ずる場合の解答であろう。彼女の小説はつまりfictionという統制された解説の中で人間(human)を規定する。しかしそれは一つの談話の中において解釈の多様性に声を与えることができるより拡大された人間の透視画なのである。そしてGeorge Eliotは実人生においては全く不可能であるということがわかったが、小説の中では釈明できる正義(justice)や、人々の考え方における柔軟性(flexibility)を獲得することを自らの小説執筆の原動力にしたのであった。つまりそれが正義であるとする判断の基準が限りなく異なるようなjusticeの類である。道徳的な責をこうむった登場人物や、真相を何も知らないで人のgossipにうつつをぬかす地域社会に、どのような解釈を与えるかということには、その当事者たちよりも小説の読み手の側にはるかに大きな権限が任ねられることになる。それで小説に登場する者達が遭遇する人生の選択の瞬間を特別な緊迫感を持って注目し、その時にその者が心に抱くもろもろの心の葛藤を克明に描くことにGeorge Eliotは終始するのである。しかし一つの行動を起す前に到った当事者の理由付けは、周囲の者達の目に触れた時、自身が思ってもいない方向に変えられてしまう場合が多々あるのであって、その推移をつぶさに見てきた小説の読み手が行なうその行為の担い手への裁定は、次第に彼の行為そのものの判断ではなく、その行為が内面的にどのような経過をたどって決定されたのかという小説の語り部の叙述により大きな重要性を置きながら成されるようになっていくのである。

(10)

Lewesと共に暮すようになった Marian が外国の著名な哲学者の著書の翻訳に基軸を置く non-fiction の分野から突然脱却し、chapter 9 でみてきたとおり scandalous だとのそしりを受けた自己の人生の選択の深層に迫り、自分に対する evil speaking への弁明を試みるために fiction の分野で執筆活動を始めると決意するにいたったのは、Marian が最愛にして最高の夫と仰ぐ Lewes の励ましの賜であったということは周知のとおりであるが、しかしそれだけで George Eliot という大作家が誕生したと断定することは間違いであると言わざるを得ない。もちろん Marian が 37 歳にして未知なる fiction の世界に踏み込む勇気を持ち、そして成功したのは彼女が何気なく書いていた故郷の Staffordshire の farmhouse の描写のすばらしさに Lewes が絶賛しそして Marian を励まし、彼女が書いたものに舞台俳優としての立場から drama 性を与えるために Lewes 自身が手を加えるという文字通りの二人三脚の成果ではあったが、Marian がそこに到るまでの過程にはそれとは別つまり次のようないきさつがあったのである。

Lewes は Marian と生活を共にするようになって事実上二つの家を賄う費用、とりわけ妻 Agnes の生活費、それから 8 人もの子供たちの生活費等を含めた多大な経費を支払わねばならない必要性が生じていた。兼ねてより執筆中であった Goethe の自伝は 1855 年に出版され販売部数が 1000 部を越える大成功の著書ではあったが、このような大家族を養うだけの収入をそれに求めることは全く不可能なことであった。その Lewes の立場を救うために Marian はより活発に執筆活動をするようになったのである。まずは Lewes との Germany への旅の間から取り組んでいた Spinoza の *Ethics* の翻訳本の出版であったが Lewes が出版社との交渉に当たり、その本の価値から考えられる高額印税を主張する Lewes の主張と出版社の言い分とで折り合いがつかず、Marian はついにその本の出版を断念せざるを得なくなったのであった。そういった経緯から Marian は多大の時間と労力を強いられる労作の割には利益の上がない翻訳をやめて、数週間のうちにたっぷり早く現金がもらえる雑誌の執筆者へと転向を決めたのである。彼女はできうる限り多数の雑誌の小論文執筆者となり、1855 年から 1857 年の間に彼女は非常に高いレベルにある驚異的な数の小論文を発表している。Marian は自らがその論文の著者であることをあくまでも伏せ仮空の男性名でそれらを発表していたのであったが、Lewes とのことで gossip を巻き起している我身の存在を表ざたにしたくないという理由の外に、それには彼女自らが言っているように「それらの論文は読者の中に強力な印象を与えているように見えますのに、もしその作者が女性であるとわかれば、その印象はいく分そがれることにもなりかねません」という理由があったのである。

このように journalist としての成功を得つつも Marian はまだ満たされない思いを抱いていた。彼女は 1845 年に、journalist からすばらしい novelist に転向した Harriet Martineau に Hannel の親叔ということで出会ってから、この Martineau の生き方を model とし、いつか自分も小説を書いてみたいものだという願望を持つようになっていたのである。たまたま fiction

style で書いたものが夫である Lewes の目にとまり、Lewes が non-fiction の分野での Marian の天才的な才能は言うにや及ばず fiction の分野における彼女の才能はそれをしのぐほどのものであると絶賛したことで、さらなるお金と名声を希求していた Marian は、自分の将来はやはり non-fiction の分野にあるのではないかと思いつつも、Lewes の勧めに傾いていったのである。そしてある朝 Marian の頭にふと浮かんだのが *The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton* の title であった。そして完成したその story を見た Lewes はそれがすばらしい wit に富み fresh であり interesting であることに驚く。早速 Lewes は Blackwood 社の *Maga* という雑誌に一拳掲載する契約を取りつける。それは初めて George Eliot というペンネームで発表された小説であったが Lewes はその本が自分の親友によって書かれたものであることを公表しただけで Blackwood に対しても多くを語らず、authorship に多大の疑問があることがその story の販売を助長することになり、ほんの一ヶ月の期間に完成させたその小説に対して George Eliot は一年間ほどの過酷な労を要する翻訳本一冊から得る収入とほぼ同額の収入を得たのであった。その *Amos Barton* の小説の成功に自信を得て Marian は偉大な小説家 George Eliot としての人生を歩みだしたのである。

(11)

上記のような状況の下に書かれ、そして Marian が小説家 George Eliot として第一歩を踏み出すきっかけとなった *The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton* は、これまで見てきた通りの経験を経てきた Marian が生涯をかけて解明しようとしてきたその人の人生の choice に到る motivation と、自らも陥りがちであるが Lewes とのことではさんざんその砲火を浴び苦渋を味わった evil speaking とへの一つの解答を示唆するものとなったのは言うまでもない。生涯を通じて Marian Evans は自分がいみじくも厳しく非難したり批判してしまった人々に対して自責の念にかけられた丁重な謝罪のメモを残している。彼女は「自分自身何のとりえもないつまらない人間であるのに、あたかも大そうな人であるかのこどく、失敗した人や罪を犯した人を酷評したり非難したりすること、そのことこそ私の舌が犯す罪なのです」と言っている。⁽²⁸⁾そして Carlyle が書いた評論のことでその評論の出版先であった John Blackwood に意見を求められた折、彼女は「私は私の心の中でしている激しい criticism をそっくりそのままの言葉で書き表わしたりまた口頭で申し上げたりすることを控えさせていただきます」と言う。⁽²⁹⁾このように evil speaking を自己に厳重に禁じた彼女の姿勢は、その三週間前に彼女の初めての小説らしい小説である *Adam Bede* が出版されて、彼女自身に向けられた他からの裁定に身をさらすことを極度に恐れたがためのものであった。⁽³⁰⁾つまり Marian Evans は evil speaking ——その者が不在であるところで彼の人格や特質をあてこすり傷つけるという行為——を自ら犯してしまうことへの恐れと同時に人からそれを浴せられることへの恐れを強く抱いていたのである。

The Sad Fortunes と次の短篇 *Mr. Gilfils Love-Story*、それから *Janet's Repentance* は月刊紙 *Blackwoods Edinburgh Magazin* の 1957 年の 1 月号から一篇ずつ掲載されたのであったが翌年

この3篇は *Scenes of Clerical Life* として一冊にまとめられ同じ Blackwood 社から出版されたのであった。この *Scenes* が Victoria 朝にあった当時の読者の好みにうまく合致したということは、作者が「宗教的」な人であると思われるにもかかわらず、そのような人の道を説く人によく見られるような「偽善的でもったいぶった言葉使いをしたりがまんできかないような偏屈さを見せたりすることもなく」、「人間の心というものを知ることにすばらしくたけていて」⁽³¹⁾「明らかに実人生から導き出されたに違いない描写の確かさ」⁽³¹⁾を目ざとく見出した初期の評論雑誌記者の熱狂を見れば明らかである。ただ George Eliot というその小説の作者が一体誰であるかということについては全く不明であったためにいろいろと臆測されていたのであったが、作者が実際には誰であるかという議論はともかく作者は「勤勉な牧師」であるに違いないと読者が一様に思っていたのはまるきり異なって、その本の実際の作者は「他の女性の夫と共に暮している女無神論者である」⁽³²⁾ Marian Evans であることがわかったとき、彼女がなぜ極力自分の身分を明かさないようにしてきたか、そしてなぜ「愛の自由契約」の下で共に暮している George Henry Lewes を通じて Blackwood に彼女の原稿が渡され始めたのかという疑問点は、彼女がそういった道徳的に非道な行為を犯した者であり自らそれを恥じているためということですっかり説明付けられたのである。1854年の7月に Lewes と共に生活するようになって以来 *Scenes* を出版する前のあまたの評論執筆から一貫してすべての執筆活動を Marian は男性名で行なっていたのであったが、彼女があえてそうした背景にはもちろん読者が悟ったそのような自己がとった背徳の行為の後めたさを Marian 自身が感じていたことは事実であろうが、これは前章の chapter10 でも少しふれたことではあるが *Westminster Review* の副主筆としての任務に着くや名編集者としての敏腕をふるい衰退の一途にあったその季刊紙を立派に立て直した経験から特に評論の場合においては男性の作者の手になるものは女性の作者が書いたものに比べてより敬意を払って読んでもらえることを Marian はよく知っていたのであった。現に 1855年の *Westminster Review* 誌に Marian はもちろん男性名のペンネームで「福音主義の教え・Dr Cumming」と題した、当時福音主義の名牧師とたたえられた Cumming 氏についての痛烈な批判文を載せているが、この評論について Marian は友人である Charles Bray に自ら「強い感銘を受けた」⁽³³⁾ 作品として讚美した手紙を送っている。これに対して Bray は「しかしその感銘は作者が“女性”であることが知れたら幾分減殺されるであろう」と言っている。小説の分野においては Jane Austen などは既に女流小説家として名作を排出してはいたが、Brontë 姉妹も最初は男性名で執筆していたことを思えば小説の世界においても男性の作家によって書かれたものの方が読者を獲得し易いという傾向があったのかもしれない。それにまた Marian は 1855年には「女性小説家に書かれた浅はかな小説」⁽³⁷⁾ という essay を書きその中で彼女は「当代英国女流作家の作品における高水準の欠如」⁽³⁸⁾ を指摘しているのであり、そのような立場からも Marian は Lewes との違法な結婚を契期として小説執筆の場合も自分自身に男性名のペンネームを与えたのかもしれない。

その George Eliot というペンネームの下で Marian Evans は少女期を過ぎた田舎町 Chilvers Coton や Nuneaton、それに Coventry などの風景やそこに生活していた人々のことなどを自由

かったつに描いたのであったがそうする中で彼女は、Lewesを彼の妻や子供達から奪った非道な女性であるという致命的な gossip や scandalous rumor や、それに John Chapman や Herberd Spencer への実らぬ恋の痛み、それからまた自己の人格形成期の福音主義と後の改宗等々の非常に難解な感情領域の探究をしたのであった。

(12)

Lewesは自分の勧めで Marian が試作的に書いた *The Sad Fortunes of the Rev. Amos Barton* を読むやいなや、彼女の対話を書く能力や小説家としての才能に確信を抱き、自らが小説家としての技量を高く評価していた Jane Austen にも彼女は匹敵するようになるかもしれないというような直観を得たのであった。Lewesはその小説は George Eliot という親友の作であることを前置きしすでに旧知の間柄にある出版社の Blackwood 社にその小説の発表を依頼する上での次のような推薦文を書いているのである。

はっきり申し上げましてその原稿を読む前は、私の友人の小説家としての力量にかなりの疑問を持っていました。しかし原稿を読んでみてそのような疑いは非常に高い賞讃に変わりました。あなたがその小説をどんなふうに思われるかは存じませんが、私の判断ではこの小説に描かれているような humour や pathos、それに生き生きとした描写や見事な観察は、(このスタイルでは)『Wakefield の牧師』以来、目にしたことはありません。——そのような思いに到った結果、私はその件であなたとお話し合いができたは大変うれしく思います。…それは四半世紀ほど前の我が国の田舎牧師の実生活を例証している物語と素描とから構成されることになるでしょう。しかしもっぱら「人間的な」面においてであり全く「神学的な」面ではありません。⁽³⁹⁾

The Sad Fortunes は他の二篇と共にそれが収められている *The Scenes of Clerical Life* (『牧師館物語』) という本のその表題からもわかるように、Shepperton の村の牧師館を舞台の中心にすえた drama であり、もう少し厳密に言えば、英国国教会内でより強い信仰への自覚に目覚めた者達の分派である evangelical (福音主義) の curate (牧師補) Amos Barton を主人公にすえた story であるが、上記の Lewes の言葉からもわかるように Amos が牧師であるのは Middlemarch において Lydgate が医者であり Bulstrode が銀行家であるのと同様に、牧師というその特殊な身分が職業として単に Amos に与えられただけのものというのではなく、それは Amos の人格の一部となっているのであり、牧師という身分を越えた一人の人間である Amos の姿を教区民の彼への gossip などを交えて多角的に描きながら、そこに暴かれる human Amos の実像と彼を取り巻く community の中に見られる人間の本質を探ることが本書の目的とするところなのである。そしてその Shepperton の村人たちが共有する「目に見える形での精神的なよりどころ」⁽⁴⁰⁾ が church であることを考えれば、*The Sad Fortunes* の chapter I の冒頭で感慨深く語られている 25 年前と比較されたそこの教会の大きな変化は、Shepperton 村の community の変容としてとらえることができ、Amos の sad fortunes はその Shepperton の村の変容の中で起ったものであるとする小説の伏線ともなるものなのである。George Eliot の小説はこのように第一作目の *The Sad Fortunes* も含めた以後のほとんどすべての小説におい

て、時代背景が執筆年代よりかなり過去に逆のぼって設定されているが、これは彼女が描く community の中の個人がその community の矛盾やそれが自己に及ぼすあつれきに苦しみそこから脱却を計りながら相互に変容していくその過程において人間の本质をとらえ、そしてその中に現在ばかりか未来をもさし示す指針を見い出すという、過去・現在・未来を有機的に考える George Eliot の思想に基づく小説執筆の手法なのである。つまり作者は人間存在についての自らの視点を *The Sad Fortunes* の次の小説 *Mr Gilfil's Love-Story* の chap. I で極めて平易な例証をあげて次のように述べている。

ああ悲しいかな！ 私たち人間は年をとると木の燃えかすに過ぎないことがあるのだ。しかし、そうだと決めつけてはいけない。よく見ればそのような人々にも、若い頃は豊かな樹液が流れ若葉が生い茂り、無数のつぼみをほころばせていたということを示す根跡がわずかなりともはっきりと見い出されるものである。だから私は、そのような燃え殻のような人々を見かける度毎に、この人たちにもかつては生命に満ちあふれていた時があったに違いないということを確認するのだ。私は、少くとも私は腰の曲がった老人やしわだらけの老婆の現在の姿に、希望と愛に満ちた…「過去」を見い出さざるをえないのだ。
(41)

The Sad Fortune の執筆が1856年9月でありそれから25年ほど前であるから1830年前後がこの小説の主人公 Amos Barton が Shepperton の村に curate としてやって来た年代である。curate というのは英国国教会の受録教区牧師である rector あるいは vicar とよばれる者の代理人であり、*The Sade Fortunes* の chap. I で作者自身が述べているように「教区牧師は一人で三ヶ所に寺録を持つことができるだけの時代であり、そのうちの二ヶ所に curate を置いて何とか賄い、残る三分の一で教区牧師自身もひどい暮らしに甘んじていた」⁽⁴²⁾ いわゆる教会の過渡期的状況にあり、⁽⁴³⁾ curate としての年収80ポンドの奉給の中で Amos が牧師としてのプライドを維持し、妻と子供六人共に一応見苦しくない生活をしていくことは当時の生活をよく心得ている作者自身が言っているように「誰にも決して解くことができないであろう難題であった」⁽⁴⁴⁾ のである。

Amos は Evangelical (福音主義) の牧師であるが Evangelicalism というのは、16世紀に政治的な妥協の産物として設立されてから二世紀ほど経る間にすっかり沈滞してしまった英国国教会を批判し、キリスト教徒に道徳生活への強い自覚を喚起しようとして John Wesley (1703—91) によって起された宗教改革であるメソヂスト運動に端を発し、国教会側の強い抵抗にもかかわらず、国教会内部の支持者によって19世紀の前半(つまり *The Sad Fortunes* の時代背景である1830年頃)に国教内に作られた分派であって、George Eliot 自身 Mary Ann と称していた娘時代にどっぷりとつかっていた宗教であると同時に敬虔な Christian であると任ずる彼女の父親 Robert Evans を始めとする Evans 家の家族全員が信奉する宗教であった。つまりもう少し詳細に述べれば、英国国教会が Cathoric と Puritan との中間的位置にあり、従って信仰も根源的にあいまい性を内包していた柔盾を打壊して、信仰への自覚を促し信仰の根源を探そうとした人々が国教会内部に他との見解の不一致を巻き起こし、国家宗教と国家のあり方を巡って派閥を生じさせ国教会を二つに分離したのである。つまり低教会派 (Low Church)

と高教会派 (High Church) であったが、Low ChurchはEvangelicalの運動に由来する国教会のProtestantであり、High Churchは1830年代のOxford運動から発する国教会とCatholicとの血縁性を主張したものである。従ってAmos BartonがEvangelicalismの牧師としてSheppertonにやってきた1830年前後はこうした宗教上の論戦が活発に行なわれ、道徳への厳しい視点に立ちキリスト教の伝道運動を押し進めるEvangelicalismとミサの典礼的本質を再認識しようとするOxford運動の影響が、徐々にEngland中部の農村地帯にも浸透し始めた時期だったのである。

つまりAmosはこのように宗教的な激動の時代にあり、当時は至極まれにしか見られなかった知的エリートである大学卒業者 (ほとんどがOxford大学卒業⁽⁴⁾) で占められていた教区牧師という職業にあり、特にEvangelicalとして神・キリストを信仰の中心にすえその基盤に立ったmoralを説く牧師であったが、本来牧師の成功不成功はcongregation (会衆) の日常にいかにかき込んで、毎日曜の礼拝の折やまたあまたの集会でいかに会衆の心を引きつける説教をするかということにかかっていたのであって、牧師の人間性が強く問われることになるのである。つまり当時の田舎の大衆は教養が低く、教育の最高学府での教養を積んだ牧師が成功を治めるためにはまず自分と会衆との知的ギャップをどう埋めるかが最重要課題として提示されることになる。ここで考えられることは、筆者がMiddlemarchについての論文の中で見てきたように、商業都市として古い体制を脱皮しつつも今だなお多分に古い体制を残し、特に医学においては旧弊の医学に甘んじ新しい医学を極力排除しようとする傾向にあったMiddlemarchに、世界的に名だたる医者となることを夢みて赴任してきた新進気鋭の医師Lydgateが、Middlemarchで代々医者として栄えてきた医者達からの防害や圧力、それから医者としてよって立つ所のcommunityの離反などに加えてrumor、gossip、scandalの力によって遂には理想を挫折させざるを得なかったばかりか、Middlemarchを追われる破目になったのと同じようなことが、Sheppertonの村の牧師Amosにも言えたのではないかということである。以降の論文ではAmosのSad Fortunesの実態とその原因と結果について述べていく。

注

- (1) 上田女子短期大学紀要25号 (2001年12月刊)
- (2) *Westminster Review* ; LondonにおいてChapmanによって発刊されていた季刊紙。1849年以降Marianが副主筆となり衰退の一途にあったのを立てなおすことに成功
- (3) *Leader* ; George Eliotの事実上の夫Henry LewesがHuntと共に発刊した季刊紙
- (4) Goethe ; 上田女子短期大学紀要25号 *The Sad Fortunes the Reverend Amos Borton* の注(9)参照
- (5) Shylock ; 1596年頃のShakespearの作品*The Merchant of Venice*に登場するユダヤ人の強欲な高利貸し
- (6) George Eliotの著書*Daniel Deronda*の中にそれが鮮明に表れている。
- (7) Thornton Hunt ; Lewesと共に*Leader*を起した。自由恋愛主義者でLewesの妻Agnesとの間に4人の子がある。
- (8) コント ; 同上紀要25号の注(11)参照

- (9) ヘーゲル；George Wilhelm Friedrich Hegel, 1770—1831；ドイツの哲学者、世界の諸相を自己否定から総合へと展開する絶対者の自己実現の過程（弁証法）として捉え、これによって自然・歴史、精神などあらゆる事象を説明する体系的哲学を説いた。物と心、主と客を止揚する理念（イデア）を中心にしたのでその思想は絶対的観念論といわれる。ドイツ観念論・ロマン主義を総合する思想家として、以後マルクス主義・実存主義など現代思想に大きな影響を与えた。
- (10) フォイエルバッハ；同上紀要25号の注(12)参照
- (11) *George Eliot and Her Morality*；富士川和男著、昭和53年2月 大盛堂書房、P17
- (12) *George Eliot, Woman of Contradictions*；Ina Taylor, 1989, George weidenfeld & Nicolson Limited, P121
- (13) Spinoza；Baruch de Spinoza, 1632—1677、オランダのユダヤ系哲学者、心と物の両界は、唯一の実体である神の二属性、二様態であるとして、デカルトの二元論に対して一元論・平行論を説き、神即自然の汎神論を主張。また世界はすべて神の因果的必然下にあるが、ただこれを「永遠の相の下に」洞察する知的直観にのみ真の自由と善・愛があるとした。
- (14) Leibniz；Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646—1716、ドイツの哲学者。国政・外交など実務に活躍する一方で思索を続け、宇宙を調和的に統合する普遍的記号学の体系を構想。モナドと予定調和を説く哲学、神学のほか、数学・言語・法律・物理など諸科学にわたる業績を上げた。微積分法の発見は著名で、記号倫理学の祖ともされる。
- (15) Comte；注(7)参照
- (16) 同上紀要25号 Chapter 3 参照
- (17) *The Real Life of Marian Evans, George Eliot, Her Letters and Fiction* by Rosemarie Bodenheimer, Cornell University 1994, P.94
- “I am ignorant how far Cara and Sara may be acquainted with the state of things, and how they may feel towards me. I am quite prepared to accept the consequences of a step which I have deliverately taken and to accept them without irritation and bitterness. The most painful consequence will, I know, be the loss of friends…”
- (18) 同上、P97
- (19) 同上、P98
- “Believe no one’s representation about me, for there is not a single person who is in a position to make a true representation.” “No one has better reason than myself to know how difficult it is to produce a true impression by letters and how likely they are to be misinterpreted even where years of friendship might seem to furnish sufficient key.”
- (20) 同上、P95
- (21) 同上、P95
- (22) 上田女子短大紀要25号 *The Sad Fortunes* の chapter(5)参照
- (23) *The Real life of Marian Evans*, P92
- “I am not mistaken in the person to whom I have attached myself. He is worthy of the sacrifice I have incurred,…”
- (24) 同上 P.88
- (25) 上田女子短大紀要25号 *The Sad Fortunes* の chapter(5)
- (26) *The Real Life of Marian Evens*, P91

- (27) *George Eliot, Woman of Contradictions* by Ina Taylor, P157
- (28) *The Real Life of Marian Evans*, P119
“…I call to mind the sins of my tongue—my animadversions on the faults of others, as if I thought myself to be something when I am nothing.”
- (29) 同上、P120
- (30) *Adam Bede* ; 1859年2月発刊
- (31) *Scenes of Clerical Life* by George Eliot, Penguin Classics, 1998, Introduction page ix
- (32) 同上
- (33) 同上 P, x
- (34) 同上
- (35) Jane Austin ; 1775—1817、イギリスの女流小説家。日常の家庭生活をユーモアと風刺を交えて描いた。代表作「高慢と偏見」「エマ」
- (36) Bronte 姉妹 ; charlotte B 1815—1855、Emily B 1818—1848 イギリスの女流小説家 代表作、Charlotte ; *Jane Eyre* Emily ; *Wuthering Heighto*
- (37) *Scenes of Clerical Life*, Introduction, P.xi
- (38) 同上
- (39) *George Eliot and her Morality*, P25
- (40) *Scenes of Clerical Life*, Introduction P.XIV
- (41) *Mr Gilfil's Love-Story*, chapter I
- (42) 「歴史と文学 ジョージ・エリオットの小説」藤井元子、近代文芸社、1995 P48
- (43) 同上
- (44) *The Sad Fortunes of Amos Barton*, chapter I
- (45) Amos氏もその一人と考えられる。

参考文献

- (1) 「ジョージ・エリオットの小説」—分析と再評価—藤田清次著 (株)北星堂書店 昭和52年7月
- (2) 「ジョージ・エリオットの小説」和知誠之助著 (株)南雲堂 1980年
- (3) 「ジョージ・エリオット」R. アシュトン著 前田絢子訳